

災害被災者支援と災害対策改善を求める広島県連絡会（略称：広島県災対連）

# 広島災対連NEWS

NO23 2016年6月15日発行

事務局：広島県労連 広島市東区光町 2-9-24-205 TEL082-262-1550 FAX082-261-5059

ブログ//h-kenroren.cocolog-nifty.com// [E-mail/bwz23598@nifty.com](mailto:bwz23598@nifty.com)

## 熊本支援 3日間「チーム広島 12」は何を感じたか

### 「チーム広島 12」奮闘記、即日感想文

#### 【行程】

- 6月13日（月） 7時 広島市東区県労連事務所出発  
12時45分 熊本市中区水前寺 支援センター到着  
13時～15時 益城町被害状況を視察（案内 宮城県 菅原氏）  
15時半～16時半 熊本市内 引っ越し補助（2階より冷蔵庫等搬出）  
泊：熊本市中区神水 コモン神水 3階
- 6月14日（火） 7時15分 出発  
8時 益城町社協ボランティアセンター 受付  
9時半 益城町 現地着 家の解体補助、及び貴重品確保作業  
15時半 作業終了  
泊：熊本市 コモン神水
- 6月15日（水） 8時半 出発  
9時～ 2班に分かれて、「屋根瓦撤去」「瓦礫持ち出し・運搬」作業  
11時半 作業終了、報告書提出  
11時45分 支援センター出発  
18時半 広島市着

#### 【参加者】

川后和幸（災対連事務局長・県労連）、門田勇人（県労連）、藤中茂、石田誠、金子邦彦（全教広島）、  
藤本健、石川昇（広島県医労連）、亀井正美（広島自治労連）徳永聖（国労広島）、  
居神友久（民商県連）、二見伸吾、林ひろし（日本共産党） 以上12名

#### 【3日間の活動を終えての感想】

◇災害支援三日目が終了。引っ越し直前に地震に襲われたおうちの家財の搬出と処理場への搬入。引っ越しのために家財を整理していたため、それなりにまとめられていても、地震から2ヶ月。新生活への準備もままならない中、ようやく手を付け始めたと言われる。震災直後は緩やかだった震災ゴミの処理区分が、この間、一気に厳しくなり、家庭ゴミは一切受け取らないことになっていると言われる。家具・プラスチック等の破砕可能物のみが搬入可能と言うことで、家財＝家具類の搬出と処理場への投入がボランティア支援のしごとになった。処理場に行って少し驚いた。搬入前と後

の重量測定、投棄物のチェックを厳密に受け、破砕ポットへの投げ入れは持ち込み者が行えということ。つまり、通常のごみ持ち込みと全く同じ手順の模様。家庭ごみは排除と厳密にしていけば、被災者の苦労をさらに増やすことにならないか、少々不安に思えた。

三日間の短い支援活動だったが、益城町等の被害は想像以上に深刻に見える。震災後2ヶ月、「今も6700名の避難者」「仮設住宅への入居始まる」「被害家屋の解体申請に列」と地元紙に掲載されていた。二日目の支援先は、まさに倒壊した家屋の解体作業のまただ中。解体にあわせて、使えるもの、大切なもの、残したいもの等を発掘し、仕分けする。手作業でしか出来ない仕事になる。解体作業はこれから本格的に始まる。一見しただけでは分からないが、多くの家屋が「住み続けられない」状態という。家屋再建に現行「災害被災者支援制度」の「支援額300万円」ではとうてい足りない。全国署名の「ただちに500万円」を実施し、本当なら1000万円の支援が必要。被災者支援運動の強化に取り組みたい。



川后 和幸

◇熊本市は、いくつかの家でひび割れなど見られるものの、平穏を取り戻しているようだ。一方で益城町に足を踏み入ると、状況は一変する。赤い紙や緑の紙も目立つ。これは、応急危険度判定と言い、自治体が被災した建物が安全かどうか判定するもの。

危険度によって「赤色 危険」「黄色 要注意」「緑色 調査済（使用可能）」の3種類に分けられる。こうした調査は、地震の発生から10日以内に終わらせるのが目安とされているが、まだ完全におわっていない。それができないと罹災証明が発行できない。広島土砂災害時にも感じたことだが、国は決めていることさえ、実行できる体制を作れない。不十分な法律であればなおさらだ。

住宅再建支援金の最高額は全壊で300万円にとどまる。昨年全国で「支援金を全壊500万円へ」の集めた署名は昨年80万筆を超えたが、戦争法成立の中、十分な審議もされないまま廃案となった。熊本地震後の署名提出では、厚労大臣は「見舞金なので増額はできない、半壊以下にも出さない。」という。財源が確保できないというのが、主な理由だ。しかし、防衛費は特別枠だ。16年予算では危険性が指摘されるMV22 オスプレイ（112億円）を4機購入する。益城町の全壊数は1026棟と報じられている。200万円の増額は、20億円余りでできる計算になる。

私たちは怒りを持ち、選挙で政治を変えるときだと思う。

被災地でみた、国土交通省のゼッケンや全国の自治体からの支援者。ボランティアは、九州各県や兵庫などから、若者も年配者も入り混じっている。ぜひ、被災地をみて、被災者と話をしよう。わたしたちにできることは、限られているが、見たことを感じたことを伝えることはできる。

「チーム広島」は無料高速道路通行券を活用し、宿泊は県労連ビルの大家さんのご好意で3階に12人2泊泊まらせていただいた。お風呂は車で5分のスーパー銭湯、コインランドリーも近くにある。今後も積極的に熊本に足を向けていただきたい

宮城県から来ている菅原さんは、軽トラで3日前に到着し2週間滞在するという。私たちを益城町に案内し、ボランティア全般を仕切ってくれた。皆が「地元の人」と信じてい疑わなかった。

福岡県労連の樋口事務局長は、毎日往復 4 時間かけて通いながら支援者の受け入れをサポートしている。熊本県労連重松事務局長は、毎日支援センターに詰めている。「7 月終わってもこのセンターは閉めないでしょう。ボランティアが必要なのはこれからですから。」という。コモン神水の大家さんの佐野さんは、「益城町の被害も凄いが、南阿蘇村は村が無くなるくらいの状況」と、語ってくれた。被災地では、私たちに当時の状況を語ってくれたみなさんと共に、私たちのボランティア活動を支えてくれている皆さんに本当に感謝する。

様々な支援の方法はあるが、行政もボランティアも圧倒的に足りていない。益城町には全壊「危険」判定を受け、そのままになっている家が、山ほど残っているからだ。

そして安倍首相は 3 度熊本の地に足を踏み入れたというが、いったい何を見たのだろう。私たちは 3 日間過ごした中で、「いまの政治は弱者に冷たすぎる」と痛感した。



門田 勇人

◇当初、雨の予報が出ていたにもかかわらず、三日間天候にめぐまれ、予定していた支援作業ができて本当によかったです。しかし、まだまだ支援は必要で、復旧にもかなり時間がかかりそうです。私たちが熊本に行っている間に、震災から 2 ヶ月目を向かえ、仮設住宅の初の入居がはじまりました。依然、避難者は 6400 人を超えており、避難所やその周りにテントを張って生活している人がいます。最大の被害を受けた益城町の近くには陸上自衛隊の駐屯地があり、町では迷彩服を着た隊員の姿が頻繁にみられます。そして、公務員官舎のような鉄筋コンクリートの建物が何十棟も空き家のまま放置されています。支援の手が足りない状況の中で、自衛隊の支援は打ち切られ、自衛隊員は駐屯地に通って行っています。必要な仮設住宅は 2600 戸とされているのに、まだ着工さえしてない住宅がたくさんあります。この何ともチグハグな状況の原因はいったいどこにあるのか。政策の矛盾、政治の課題を感じずにはられません。こんなときにこそ、被災者の支援を最優先できる政府を、これから、私たちの手でつくっていききたいものです。



藤中 茂

◇3 日間の活動で、熊本のみなさんに喜んでいただき、自己有用感を感じたが、広島に近づいていくにつれて無力感も強く感じた。

1 日目のレポートで、国や自治体の役割について触れたが、活動を終えてあらためて、国や自治体に「できること」はたくさんあるのではないかと思う。被災地に向かう車窓から眺めた広大で整備された熊本県庁の敷地、緑の芝生がまぶしい自衛隊の敷地（北には広大な演習場も広がっている）、戦地でもないのに迷彩服で出勤するたくさんの自衛官、九州財務局の看板が付られた自衛隊員の官舎だったと思われる多くの空き宿舎をなど見ると、行政ができること、私たちが行政に要求することがたくさんあるのではないかと感じた。

日常業務に支障が出るのだと言われそうだが、こうした時こそが必要な日常業務であり、重機の操縦、がれき等の運搬、兵站演習で培った宿舎の造営…。「国民の財産、生命、安全を確保する」と言いながら、被災者の生活は自己責任だと背中を向けられているように感じた。

ボランティアのマッチング、宿舎の確保をしていただき、スムーズな活動を支えて下さった現地のセンターのみなさん、そして、広島からの十人十色の12人のボランティアをまとめて下さった県労連・門田事務局長に、心から感謝したい。



石田 誠

◇3日目の朝、災害センターで集合したとき、到着した日のことを思い出した。

緊張し厳しい顔で挨拶したことや、勝手の分からない事務所で、ぎこちなくお水を貰ったりしたなど。ただ、短い間だったけども、何度かセンターを行ったり来たりしながら、他県の方々と作業したり被災地と一緒に回って行くうちに、作業を終えて帰ってくる場所には仲間がこんなにいるんだと何故か自分が元気をもらうようだった。

また熊本は被災して大変というだけでなく、疲れた体を癒やしてくれる温泉があったり、熊本名物の馬刺やラーメン、焼酎があったりと、素敵な場所だった。

最後に、「がんばれ」とか「がんばろう」とか、やたらと横断幕が掲げられているのが、よく見受けられた。

もうあんたらがこれ以上頑張らんでもいいじゃんと思直した。

でも作業場で出会った家族の顔を思い出すと、どうしても頑張ってくださいという言葉以外にかけられる言葉が見つからないような気がした。



金子 邦彦

◇わずか3日、実質1.5日程度の支援参加ながら、広島災対連として組織され、派遣いただいた意義は大きいと振り返ります。

私たち自身が団結や連帯をつよめ、「市民のなかにあって、そのくらしと基本的人権を守る」たたかいに備えるために。

宮城から軽トラで駆けつけて、一週間にわたり支援活動にたずさわる、Sさんに助けていただきました。ナビを使わず、熊本の町を駆け巡っておられます。

彼を送り出した仲間がいます。

淡路島から軽四に乗って、

車中泊を続けながら、益城町のボラセンに通い続けるIさんと、朝出会いました。

暑さ対策の装備について、気さくにお声かけ頂戴しました。





奥さんは一人で農作業を引き受けてくださっているそうです。

熊本県益城町を訪れて、災害に共に立ちむかう市民の善意とたすけあいは、着実につよく、広がってきていることも確信しました。

問題はやはり、自公政治が、人々を支えるためには向かず、人々を自公政治の道具に使う、「逆さま政治」のままであること。

ちからをあわせ、いま、たたかおう。

藤本 健

◇15日の災対連は2チームに別れて午前の活動。私たちは5人で個人宅の災害による引っ越しの際の不要家財の搬出とそれを処理場に持っていく作業となりました。(作業は8人)

木造2階建てから軽トラ2台分を運び出します。小物はバケツリレー方式。大物は場所が狭いため、知恵の輪のように頭を使いながらなんとか運びだします。処理場は木材のみだった為、1台を木材、1台を金属、ガラスと分けました。運び出しが終了すると50代の女性の家主から笑顔で「ありがとうございました」と言われました。作業時は家主と離れたところにいたため、話すことはありませんでした。ボランティアの作業をするときに、被災者がなぜこの作業を必要としているのか？を要員に説明してあれば良かったと感じました(もし、説明があって私が聞いていないだけならごめんなさい)。作業中にはどうしてこの作業をやっているのだろう？とか、この物は使うの？使わないの？など色々考えている自分がありました。要員のモチベーションも上がると思います。ただ、依頼主にとっては不必要だったり、プライバシーの問題もあり色々難しいことでもあると思います。

その後、車で25分ぐらい離れた処理場に行き、皆で車から直接、木製不要家財を大きな処理釜に運び入れました。その後、支援センターにもどり、3日間の御礼を伝え12時前にすべてが終わりました。

3日間の感想。① 天気が良くて何よりでした。雨が降るとやることの選択肢がかなり減るとのことです。② ボランティアを通じて、人と人の繋がりができたことが良かったです。14日の作業の終わりには、依頼主のおばあさんが、私達に「ありがたいありがたい」と言われました。私たちはその言葉が「ありがたい」であつたし、喜びにもなつたはずですよ。

③ 被災者の方の笑顔に勇気をもらい、励まされました。知人の熊本県人が言っていました「熊本の人には前向きだけ」。すべての人がそうではないのだろうけど、そういう姿勢と笑顔は今回見られました。

④ 2ヵ月たっても、被災地の現状が厳しいことが分かりました。いたるところにブルーシートが建物に掛けられ、全壊家屋、損傷のある家屋が多いままです。それに対するボランティアの数は足りているのか？疑問です。国は、県は、何ができるのか？ 私達ちはなにができるのか？私は？ できることのひとつは伝えることだと思います。今回の経験をまず、わたしの周りの人たちに伝えていこうと思います。

⑤ 広島から一緒に行ったみんなといろいろな話ができて楽しかったです。⑥ 靴底鉄板が有効でした。解体現場で釘を踏みましたが、怪我をしなくてすみませんでした。日焼け対策が必要。腕が日焼けで真っ赤になりました。半袖はだめですね。



石川 昇

◇15日 早朝、1時間のウォーキングをした。新しいマンションの2階部分に亀裂、熊本県庁舎にクラック、墓は倒壊したままなどなど。熊本市内の瓦礫撤去。その後、3日の支援の報告書作成。これからの支援の必要性を感じた。

亀井 正美



◇ 昨日は平日にもかかわらず作業ボランティアは300人とのこと。私たちの作業グループのリーダーを務めてくださった菅原さんは宮城県から自営業を休業して一人で軽トラで来られていました。どの災害でも国中に助け合いの精神が根づいていることに感動しています。

共同センターの前では通りすがりのお年寄りが私たちの広島からの車両をみて大変感謝されました。

しかし、復旧作業は殆ど進んでいないと感じました。

無料で宿泊させていただいた熊本県労連関係者の方、ありがとうございました。

・今後の課題 私たちにできることは、①募金②ボランティア③災対連の署名だと思えます。微力でもできることをやるしかないですね。



徳永 聖

◇広島の大豪雨災害を経験して、今日本中どこでも、いつ災害に見舞われるか分からない時代になったことを痛感しました。そんな折りに今回の熊本地震。被災地は想像以上の惨状、被災者の苦難は容易に想像出来ます。

私たちボランティアの出来ることは限界もあり、ささやかな手助けでしょうが、助け、助けられる関係が大切なことだと今回の活動を通じて改めて実感しました。益城町での倒壊家屋の解体撤去作業の現場で90歳を超えたおばあちゃんが私たちボランティア一人ひとりに何度も何度も繰り返し「ありがとう」と声をかけてこられた時は、素直に来てよかったと。

本来、国や行政がやるべきことが山積しています。この国は災害列島なのだから。やってはいけないことは、そんな災害列島の上で原発を動かすこと。

人の尊厳を大切に作る国にしなければならないと思いつつ帰路についています。

居神 友久



◇●14日(火) 午後、気温30℃ ときおり涼しい風がふく。

引き続き、同じお宅で家財道具の救出です。午前中は2階の物を運び出しましたが、午後は1階です。重機が天井の太い梁と2階の床を上手に剥がし、1階の物がガレキとともに見えてきました。ここはおばあちゃんの部屋だったそうで、おばあちゃんも避難所からやってきました。なんと91歳。

1階の物はほとんどダメなのではと思いましたが、そうでもありません。ミシンが無傷でみつか

りました。隣に金庫があったので、そのおかげで潰れることもなく、また雨がしみこんでもいませんでした。このミシンで袋物をつくっていたそうで、その作品もすこし土埃がついていましたが、ほぼきれいな状態で発見しました。

「大変だったですね」と声をかけると、「91歳まで生きてきたので、いつ死んでもいいと思っていたが、死にたくない、助かりたかったです」とおばあちゃん。

「せっかく命拾いをしたのでですから、100歳まで生きて下さいね」とボク。

リクエストに応じていろいろ発掘しましたが、作業終了間際に「おばあちゃんの貴重品の入っている袋があるはずなのでそれを探して欲しい」と奥さんに言われて、必死にさがすと、それらしき袋を発見。おばあちゃんに「これですか？」と聞くと「そうです」という返事。手を合わせて拝まれました。

作業を終えて帰るとき、見送ってくれたおばあちゃんは涙を流していました。そこまで喜んでもらえて、こちらも感激です。来てよかった。

#### ●15日（水）午前 晴れ

ボランティア最終日。今日は熊本市内で活動。2手に分かれ、ボクのチームは、家財道具を運び出し、処分場に捨てに行くことです。

部屋の中は家財道具が段ボールに詰められていますが、行き場がまだないのでしょう。2階の天井は雨漏りがしてカビだらけ。蛍光灯のカバーに雨水が貯まっています。水を少しずつ出し、カバーを外しました。洋服ダンスに桐のダンス、食器棚、テーブルなどを出しました。軽トラックに1台分と少々。作業は1時間ほどで終了。「このぐらいのことしかできず、申し訳ありません」とボクが言うと「いえいえ、ありがとうございました」と深々とお辞儀をしてくれました。

お昼に熊本をあとにし、午後6時前、広島に戻ってきました。

最初の震度7の地震から2ヶ月。被災地の復旧作業は遅々として進んでいません。壊れた家々はほとんどそのままです。熊本県が整備中の応急仮設住宅は232戸しか出来ていません。壊れた住宅は14万棟で、約6400人が避難所生活を続けています。東日本大震災もそうですが、自助努力ではなく、人とお金を被災地に使い、政治の力で震災復興すべきです。



二見 伸吾

◇今日の作業は家から廃材を運び出し捨てに行きました。一見するとなんともないように見える家でも玄関に黄色い紙が貼ってあり瓦が落ちるので注意とありました。

二階から壊れたダンスなどいくつか運びましたが二階の電灯の中に水が入ってました。屋根にヒビがいて瓦が落ち水が入ったのだと思いました。「リフォームしたばかりだったの」と家の人は話しておられました。出る時、少し離れた車まで来て何度もお辞儀をしました。



林 ひろし



## 熊本県益城町の風景（6・13、14）

持ち主の許可は得ていませんが、復興がすすんでいないことをお伝えしたいので、掲載させていただきます。ご理解をお願いします。

